

第5学*組 国語科学習指導案

場所 5年*組 教室
指導者 奥沢 志乃

1 単元名 字配り・文字の大きさ
教材名 「山道」 (東京書籍5年)

2 単元を貫く言語活動とその特徴

単元を貫く言語活動として「字配り・文字の大きさ」に関する言語活動を位置付けた。
児童に学習の見通しをもたせるためには、具体的な学習過程をもたせる配慮が求められる。そこで、単元の初めの導入段階で手本となる作品をダイナミックに示し、興味と関心を引きつける。そして、それを手本に、単元の過程でどのような知識や技能を身に付けたい、よりよい作品に仕上がるかを考える時間の確保に努めたい。さらに、単元全体において、相互の作品に対する思いや気づきを交流し合える、充実した鑑賞の場面を設定していきたい。

このように単元を貫く言語活動を具体化する作業を通すことで、書写の中で言語活動に最も必要とされる知識や技能が見えてくるようになる。そして、次第に漢字どうしても、画数に応じて文字の大きさを覚えて、つり合いをとりながら字配りよく書くことや「しんにょう」の払い出しの位置や筆遣いの定着を図ることができるようになると思われる。

3 単元について

(1) 児童観 (*名在籍)

本学級の児童の「書道に関する実態調査」の結果は下記の通りである。

内 容	結 果
・書道の時間は好きですか。 ・「好き」な理由	好き *名 . 嫌い *名 . どちらでもない *名 ・文字が上達している・書道に自信がついてきた・筆遣いの基本が分かってきた・交流の時間が楽しい・緊張感が好き・褒められる・BGMが流れて落ち着いた雰囲気がいい
・「どちらでもない」の理由	・手本のように上手く書けない・用具の後片付けが面倒・手が汚れる・褒められない・「トン」「スー」「ピタッ」のリズムがつかめない・交流タイムがはずかしい

書道の時間に対して約*割の児童が好感的な思いを抱いている。しかし、嫌いではないものの、書道に対して、消極的でやや苦手意識を抱いていると思われる児童が*割いる。特に、*割の児童には、個人がもつ技術の未熟さを向上させ、苦手意識の克服を図り、書道への自信につなげられるような配慮に努める必要がある。

児童の技術向上と自信につなげるためには、自己作品に対して交流し合う、和やかな鑑賞の時間を大切に取り組みたい。そして、その場面で児童相互が「どこが、どのように、上達したのか。」を具体的な言葉を通して伝え合うことで、次時への意欲と意欲につなげたい。そして自己作品に対する心地よい達成感と成就感を掴ませたい。

本単元では、『具体的に褒めて、自信をもたせる』学習展開を図っていきたい。

(2) 教材観

本教材でのねらいは、学習指導要領[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(2)]-「ア用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。」「ウ一毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。」であり、文字の大きさについて学習する。

文字の大きさについては、第4学年の硬筆で、仮名は漢字より小さめに書くことを学習している。既習学習を想起し、同じ漢字どうしても、画数の少ない文字は、多い漢字より小さめに書いてつり合いがとれるようになることを理解させていくことで、文字と文字とのつながりをしっかりと意識しながら運筆の定着を図りたい。

(3) 指導観

「書写」の学習では、姿勢・執筆法の指導を重視して取り組んでいる。また、運筆の基本である「トン」「スー」「ピタッ」などの擬音語を用いて点画の筆圧を感覚で捉えるようにしている。

高学年では、穂先の動きに着目して点画のつながりをこれまで以上に意識できるようにしたい。「穂先の動き」については、中学年ウで、横画・縦画や左右の払いなどの点画の種類ごとにある一定の穂先を指導しているため、本単元では、点画の中での穂先の動きだけではなく、点画から点画へ、さらには、文字から文字へと移動していく過程に重点を置いて指導にあたることで、「穂先の動き」と「点画のつながり」とは一体化しているということを体感で捉えさせるようにしていきたい。特に、「しんにょう」の筆遣いは児童にとって難しいと思われるので、穂先の弾力を生かしたリズムカルな運筆を習得させていきたい。

4 単元の見込み

- 既習事項に注意して書こうとしている。(関心・意欲・態度)
- ◎文字の大きさを整えて書くことができる。(技能)
- 画数に応じて文字の大きさを変えて書くことと「しんにょう」の書き方を理解することができる。

5 指導と評価の計画 (3時間扱い 本時は第3時)

次	時	学習活動及び内容	関	技	知・理	評価規準 (方法)
一	③ 本時	・「山道」のまとめ書きをし、自己評価する。	○	◎	○	・画数に応じて文字の大きさを変えて書くことと「しんじょう」の書き方を理解している。 (作品・発表・ふり返しカード)

6 本時の学習

(1) 目標

用具の準備や姿勢・執筆に気をつけ、画数の少ない文字は多い文字より小さめに書き、つり合いを考えながら、まとめ書きをすることができる。

(2) 準備・資料 手本用「山道」の拡大図、譜面台 (発表用)

(3) 展開

学習活動・内容	指導上の留意点・評価
<p>1 筆順を確認し、試し書きをする。</p> <p>2 本時のめあての確認</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>自信作『山道』を語ろう。</p> </div> <p>3 まとめ書きをする。</p> <p>○「山」の画の長さや方向</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1画目の縦画を文字の中心として長く書く。 ・3画目の終筆の縦画は、1/3が下に出るように少し内側に送筆する。 <p>○「道」の画の長さや方向</p> <ul style="list-style-type: none"> ・六画目の「折れ」を真下に折るように書く。 ・「しんじょう」の11画目は左へ傾くように書き、12画目は右下に下がるように書く。 <p>○文字の外形と大きさ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「山」の外形は真四角を意識して書く。 ・「道」は縦の長方形になるように意識して書く。 <p>4 完成作品を交流し、本時の学習を振り返る。</p> <p>《予想される児童の反応》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の作品は、初書の時よりも、大小のつり合いがとれて上達しているね。始筆と終筆の送筆がとても綺麗だね。 ・「しんじょう」は、5カ所の●点の所で筆を止め方向を変えながら書いている様子が良く伝わるね。 ・一画一画、空筆の繋がりを意識して送筆したため、全体のつり合いが揃って、文字が上達したと思う。 ・苦手だった「トン」「スー」「ピタッ」のリズムが揃ったように感じたため、滑らかな作品に仕上がった。これからも、運筆法のリズムを大切にしたいと思う。 	<p>・筆の持ち方や姿勢などの基本事項について、試し書きをする前に確認し、また、仮名は漢字よりも小さめに書いてつり合いをとることを確認する。</p> <p>・前時に書いた「山道」の試し書きと練習後の字をもとに本時のめあてを確認する。</p> <p>・「山道」の「山」を大きく書いたものと教材文字を示し、どちらが字配り良く見えるかを考えさせ、画数の少ない「山」は、画数の多い「道」よりも小さめに書くことで、つり合いがとれることに気づけるようにする。</p> <p>・書き始めから書き終わりまでを無理なく繋いで書き進められるようにするために、「トン」「スー」「ピタッ」などの擬音語を用いて空筆の軌跡のリズムで掴ませるようにする。</p> <p>・「しんじょう」の終筆は、やや右払い右上になるように送筆する。さらに、11～12画目にかけて、5カ所の●点のところ一度、筆を止め方向を変えるように練習を重ね習得できるように、随時、声かけを行うようにする。</p> <p>・画数の少ない文字は多い文字より小さめに書き、上下左右の外形と全体の大きさを考えながら、つり合いのとれた運筆になるようにする。</p> <p>・「山」の「縦画」の間隔と「道」の六～九画目の「横画」の間隔を揃えるようにする。</p> <p>・交流を図る時間では、再度、本時に至るまでの学習課題と過程を振り返り、交流し合う視点を全体で確認してから活動に入るようにする。</p> <p>・自己作品の交流では、和やかな温かい雰囲気を大切に、児童相互が「どこが、どのように、上達したのか。」を具体的な言葉を通して伝え合うようにする。</p> <p>・自分と友達の作品を比べながら、それぞれの作品の良さを交流していく中で、字配りや文字の大小のつり合い、運筆法の大切さに気づかせたい。</p> <p>・本時までの課題について自己評価することで、目標への達成感やそこへ向かって努力したことへの満足感が得られるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>(評) 用具の準備や姿勢・執筆に気をつけ、画数の少ない文字は多い文字より小さめに書き、つり合いを考えながら、まとめ書きをすることができる。 (作品・発表・ふり返しカード)</p> </div>